希望か、それとも絶望か？
――アフリカにおける穀物生産および消費をめぐる現状とその 2100 年への展望――

千葉大学　妹尾 裕彦

世界銀行は、1 日 1.25 ドル以下の所得水準で暮らす人を絶対的貧困層とし、その人数と人口比率を推計している（Chen and Ravallion [2008]）。これによると、世界の絶対的貧困層は、1981 年の 18.9 億人から 2005 年には 13.8 億人まで減少した。人口比では 51.8%から 25.2%への低下である。ところが、サブサハラアフリカの絶対的貧困層は、この間に 1.8 億人増加し、2005 年には 3.9 億人となった。ただしその域内人口比は、50%台のままである。つまりアフリカでは人口自体が増えているので、絶対的貧困層の人数の増加にもかかわらず、その域内人口比はほとんど変わっていないのである。本報告は、21 世紀のアフリカが抱える課題を、この人口とそれが必要とする食糧の面から検討するものである。

報告では、まず国連の「世界人口推計（2010 年版）」に基づいて、21 世紀におけるアフリカの人口動態を検討する。もとより同推計では幾つかのシナリオが提示されているが、いずれも特殊な仮定に基づいているため、一般にもっともありうるシナリオと理解されがちな中位推計でさえ、蓋然性の高い見通しだとは言えない。本報告では、このことに留意しつつ、21 世紀のアフリカの人口動態をグローバルな規模で描き出す。

次いで、FAO（国連食糧農業機関）の統計に基づいて、アフリカにおける穀物の生産および消費をめぐる現状について、他の途上国地域との比較を交えながら、明らかにする。ここで中心となる論点は、アフリカの穀物生産の低い土地生産性と、その脱却に向けた展望である。この点については既に優れた研究（平野[2009]）が存在するが、本報告では、最新の統計に基づいて先行研究の再検討を試みる。そのうえで、アフリカの穀物需給はきわめて厳しい状況にあるものの、低い土地生産性の改善に向けた希望の萌芽もあることを指摘したい。

最後に、現時点では大幅な需要超過となっているアフリカにおける穀物の需給ギャップについて、その 2100 年までの展望を探りたい。各国の穀物の需給ギャップの変動要因としては、①各国の穀物の生産量の見通し、②各国の 1 人当たりの穀物消費量の見通し、③人口動態、の 3 つがある。本報告では、これらの要因から複数のシナリオを立てて、アフリカにおける穀物の需給ギャップの将来動向を推計する。現在 30 代以下の先進国の若年・少年層は、おおむね 2050～2100 年頃まで生き続けるが、この若年・少年層世代が自らの存命中にアフリカにおける穀物の自給の達成を目撃できるかどうかは予断を許さない、ということが推計結果から明らかになる。